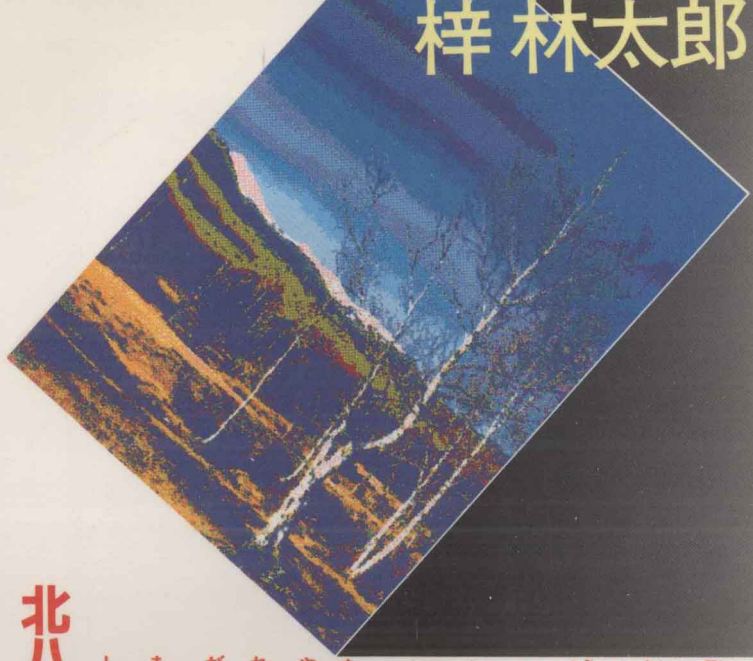
梓林太郎



北八ヶ岳

縞枯山殺人事件

しまがれやま

徳間文庫

北八ヶ岳縞枯山殺人事件

© Rintarô Azusa 1991

あ-15-4

1991年7月15日 初刷

著者 梓林太郎

発行者 荒井修

東京都港区新橋四―一〇 〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)

振替 東京四―四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-569341-1 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

北八ヶ岳縞枯山（しまがれやま）殺人事件

林太郎

徳間書店

目次

プロローグ　5
第一章　雪中に消えた女　13
第二章　若村季句子　34
第三章　北側の女性遺体　62
第四章　才賀容子　81
第五章　まだ死者はいた　104
第六章　混迷の樹林　125
第七章　クラブの女　148
第八章　白い凶器　175
第九章　山をやる男　200
第十章　川沿いの家　221

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十一章　怨念の矢　246
第十二章　アリバイの網　266
第十三章　枯木（こぼく）の墓　280
エピローグ　302
解説　長谷川卓也　305

プロローグ

桜前線の北上が新聞やテレビで伝え始められたが、北八ヶ岳の山々はまだ深い雪をかぶっていた。

天候さえよければ、山肌の雪は陽光を鋭くはね返し、春が近づいた気配を感じさせるのだが、きょうは朝から曇天だった。

縞枯山荘は、北側の北横岳、大岳と、南側の縞枯山にはさまれた平地に建っている。この山荘は通年営業しているし、横岳ロープウェイも運転しているから、雪山をやる者にもよく利用されている。冬山初心者には絶好の足場である。

横岳ロープウェイの山上駅を降りるとすぐ眼の前には、坪庭と呼ばれる溶岩台地がある。無雪期は、黒々として奇怪な形をした溶岩がゴロゴロした中に、丈の低い針葉樹や高山植物が茂る自然庭園だから、これの探勝に訪れるハイカーでにぎわうのだが、三月初旬にさしかかったばかりの今は、冬装備で身をかためた登山者が日に数人泊まる程度である。

縞枯山荘管理人の稲垣は、若い女性客を一人送り出した。ここ二、三日天気がはっきりしないせいか、ゆうべは登山者が四人泊まったきりだった。四人は早朝、山荘を出て行った。いずれも二人連れで、一組は麦草峠からやってきて蓼科へ抜ける途中で泊まり、一組はその反対のルートをたどる男たちだった。

若い女性客は単独だった。ロープウェイでやってきたといった。稲垣が聞いたのだ。軽登山靴を履いていたが、ザックは背負っていなかった。鮮やかなブルーのダウンジャケットにベージュ色のズボン姿で、茶革のショルダーバッグを持っていた。

毎年今頃になると、こういう客が一人二人とやってくる。都会や温暖な地に咲き始めた花につられて、訪れるハイカーである。樹間に厚く積もった雪を見て震えあがる人もいる。

稲垣は女性の格好を見て、春が近づいた時季をあらためて知った。

その女性は、ダウンジャケットを脱いでコーヒーをゆっくり飲み、棚に並べてある絵はがきやみやげ物を手に取ったりして、小一時間過ごした。そのあいだ何度か天気が気になってか、外に眼をやっていた。稲垣は、ロープウェイの発車時刻を気にしているのだろうと見ていた。

女性が山荘を出て行ったのは午後三時半頃だった。

これから入ってくる客があるとすれば宿泊の登山者で、一般の観光客がやってくる時間ではない。

稲垣は、妻と二人きりでこの山荘に住んで営業を任されている。その妻は炊事場で洗い物をしていた。彼はガラス窓をのぞいてから外に出た。

「おい。降ってきたよ」

彼は、炊事場の妻に声を掛けた。水音の中で妻の返事があった。

どのくらい前に降り出したのか、テラスには薄く雪が積もっていた。その雪の上に足跡があった。少し前にここを出て行った女性のものに違いなかった。

稲垣は、大声で妻を呼んだ。

「今のお客、ロープウェイの駅へ行ったんじゃないんだ」

妻は濡れた手を拭きながら、サンダルをつっかけた。

「ほんと」

テラスを下りた足跡は、左に向かっていた。ロープウェイ駅とは反対である。

稲垣は空を仰いだ。粉雪に大きな雪片がまじり始めていた。正面の縞枯山はかすんでいた。

「こりゃひどくなるな。あのお客はこんな時間にどこまで行くつもりなんだ」

「ロープウェイ駅の方角を間違えたんじゃないかしら？」

それだとしたら、十五分か二十分歩いて間違いに気付くはずだ。

こうしているうちに雪の降り方がひどくなった。稲垣は、長靴を履いて羽毛服を着た。妻が

毛糸で編んだ帽子を差し出した。

彼は、東に向かって走った。女性の足跡は確実にそっちに向かってつづいていたが、百メートルと行かぬうちに降雪に消されてしまった。

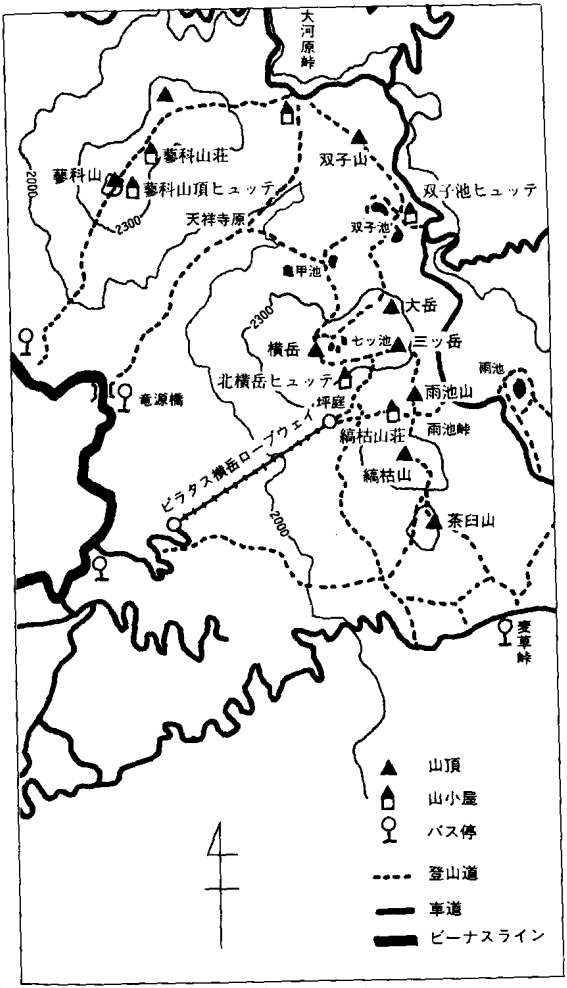
稲垣は、雨池峠まで走ったが女性に追いつくことができなかった。女性は径から逸れて雪を避けているかもしれないと思い、彼は、両手を口に当てて呼んだ。だが、応える者はいなかった。

雪は一段と激しくなった。縞枯山も北横岳も見えなくなり、八丁平は薄暮に包まれた。稲垣は自分の帰り径が心配になった。

彼の頭にふと二年前の冬のことが浮かんだ。ロープウェイを降りた単独行の登山者が、山荘に向かうわずか三十分のあいだに猛吹雪に遭って遭難したのだった。

彼は山荘に引き返した。妻は土間に立って心配顔をしていた。女性客が見つからなかったことを妻に告げると、彼はロープウェイ駅に向かってふたたび雪の中へ飛び出した。山荘に電話がないのだ。

電話を入れた諏訪警察署外勤課では、その女性客は、いったんは雨池峠方面に向かったが、すぐに方向を間違えたことに気付いて、ロープウェイ駅へ引き返したのではないかといった。稲垣もそれを考えて、駅の係員や売店で女性のことを尋ねたあとだった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

「そりゃ心配だな」

外勤課長は女性の年齢や服装を稲垣にきいた。あした雪が小やみになったら付近を捜索するといった。その女性が到着しているかもしれない宿泊施設への問い合わせもするといった。

連絡を終えた稲垣は、山荘へ着くのに無雪期の二倍の時間を要した。雪の深さよりも、北からの吹き下ろしに難渋したのである。

稲垣が山荘にもどると、五人パーティーが雪をかぶった着衣を脱いでいた。彼らは、麦草峠から茶臼山、縞枯山を越えてきたのだという。軽装の女性に出会わなかったかをきいたが、五人は首を横に振った。

その夜、稲垣は何度も窓から外をのぞいた。吹雪は真夜中にやんだ。

翌朝、警察の捜索隊が登ってきた。

縞枯山荘にいた五人パーティーが捜索協力を申し出た。稲垣も参加した。

「お茶一杯飲んだだけだがうちのお客さんだ。放っておくわけにはいかない」

そういって彼は、ワカンジキを履いた。

十時頃になって薄陽が当たり始めた。樹林は、枝にのった雪のかたまりを落とした。

昼少し過ぎ、縞枯山山腹の雨池峠側斜面で、捜索に参加した登山パーティーが、妙な物を見

つけたといってホイッスルを吹いた。辺りに散っていた隊員が雪を蹴って駆け寄った。
妙な物は、手袋をはめた人間の片腕だった。稲垣は瞬間的に、きのうの女性かと思った。が、雪面に突き出した腕は真っ赤な羽毛服を着ていた。行方不明の女性は鮮やかなブルーのダウンジャケットだったのだ。
雪を払うと男の顔が現われた。死亡しているのは明らかだったが、顔を真上から見た隊員は、ぎょっとして上体を退いた。その男は片方の眼から血を流して死んでいるのだった。
ザックに片腕を通したまま仰向きに倒れた格好だった。上着と同じ色のオーバーズボンをはき、ブルーのロングスパッツを着けていた。完全な冬山装備である。
薄く髭が伸びた顔は三十歳見当だった。
諏訪署外勤課の永家主任は、遺体の脇にしゃがんだが、隊員の一人を呼んで低声でなにかいった。
稲垣はそこを上からのぞいた。片方の眼から流れ出た血に雪が染まっていた。
雪の中から遭難者の物と見られるピッケルが出てきた。永家主任はそれを注意深く調べていたが、
「おい。刑事課へ連絡しろ」
と、眉を険しくした顔をあげた。

命令を受けた隊員は雪を蹴って駆け出した。

巨牛がうずくまったような山容の北横岳の頂上から白い雲が払われて、斜面を銀色に輝かせた。振り返ると、縞枯山の山頂にも蒼空が広がっていた。

縞枯山（二四〇二メートル）は、南面の山腹に群生するシラビソやコメツガが、帯状になって枯れ、無雪期は緑と白い帯が交互に美しい縞模様を見せるのだ。この横縞状をなす樹林の立枯現象から山名が生まれている。俗に縞枯れ現象と呼ばれるこれは、森林の世代交代を示すもので、日射量、降雨量、風力などの自然現象の影響によって針葉樹が、百年から三百年周期で新陳代謝を繰り返すものとされている。

同じ現象は、中山の西南面や蓼科山の一部にも見られるが、縞枯山のそれは、極めて鮮明で、南側の五辻から見あげる縞枯れは圧巻であるし神秘的でもある。

この縞枯れの樹林に、きのうの女性は迷い込んでしまったのか、足跡はまったく分からなかった。

第一章　雪中に消えた女

1

諏訪署の刑事道原伝吉は、非番で自宅にいた。いや、ついさっきまで諏訪湖畔にあるゴルフ練習場にいたのだ。彼は最近まで登山以外のスポーツというものに縁がなかった。ゴルフのルールも知らないし、クラブに手を触れたこともなかった。

ゴルフ場に足を踏み入れたのは去年四月、八ヶ岳山麓にある六か所のゴルフ場に、ゴルフバッグに詰められた若い女性のバラバラ死体が送られてきた事件捜査の際が初めてだった。

彼の自宅の隣家が勤務医で、この人は早朝ジョギングはするし、病院から帰宅すると縄とびをする。休みの日にはたいていゴルフに出掛ける。冬場は霧ヶ峰へスキーに行く。週に一度はガラオケスナックで十曲ぐらい、ほとんど雑音としかきこえないような歌をうたう。

非番の日に家の中でゴロゴロしている四十六歳の道原に、運動をすすめたのはこの人だ。ジョギングや縄とびは飽きてしまうだろうから、少しでも向上心をかき立てる運動をやるのがよいと、顔を合わせるたびにいったものだ。

そこで道原はゴルフを、というよりも練習場へ通うようになった。今は、十回振るうち一回ぐらいはボールが微動だにしないことがあるが、隣家の医師は、長足の進歩であるという。週に二回は練習して、どのクラブを振ってもボールの飛距離が同じでなくなったら、彼を八ヶ岳山麓のコースへ案内すると医師はいっている。

「伝さん、いたかね。よかった、よかった」

電話を取った道原に、小柳刑事課長がいった。非番の日に署から自宅に電話が掛かってきてよい報らせであったためしがない。

「外勤課から連絡があってね、北八ヶ岳の縞枯山で登山者が死んでいたんだが、その死体に気になるところがあるっていうんだ」

それで課長は死体が発見された現場へ行ってくれというのだった。

「死んでいるのは一人でしょうね？」

「ああ、一人だし、首も腕も足も胴体にちゃんとついているようだ」

課長も、約一年前のバラバラ死体事件を思い出したようだった。

「女性ですか？」
「男だ。サダと今井が車でそっちへ向かった。休みなのにご苦労だが頼む」
サダというのは、貞松刑事のニックネームだ。貞松は二十七歳で独身である。今井刑事はそれより二歳若い。
道原は、背広に着替え始めたが、現場が山岳地だったのを思い出し、毛の厚いシャツに羽毛服を着た。妻がいれば、手袋や厚い靴下やらはたちどころにそろうのだが、彼女は夕食の買物に出掛けていなかった。
道原がメモ用紙に「事件だ」と書いてこたつ板の上に置いたところへ貞松がやってきた。貞松も今井も紺色の防寒服を着ていた。
「ご苦労さまです」
道原が玄関に立つと二人が声をそろえた。
「道原さん。久し振りの事件ですね」
貞松はなんだかうれしそうで、声が弾んでいた。
「道原さん。登山靴はないんですか？」
ゴム長靴を見て貞松がいう。
「あるが、ここ二年ばかり足を入れていない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong